

探鳥会スタッフ通信

No. 1 2013 年 4 月号

B 公益財団法人 日本野鳥の会
Wild Bird Society of Japan

「探鳥会スタッフ通信」は、探鳥会の考え方や様々な運営手法について、全国の連携団体の探鳥会リーダーの皆様と情報交換を行うために発行するメール通信です。

目次

- ◆ごあいさつ
- ◆安西英明の探鳥会講座 「伝説の案内人の思い出」
- ◆探鳥会のリスクマネジメント講座 「シリーズ第1回：ヤマカガシ」
- ◆探鳥会保険集計結果
- ◆その他

◆ごあいさつ

「探鳥会スタッフ通信」の発行に当たり、一言ごあいさつを申し上げます。

日本野鳥の会は、来年(平成 26 年)創立 80 周年をむかえます。日本の自然保護 NGO として、これだけ長きにわたって活動を続け発展させることができたのは、関わってくださったみなさま方一人ひとりの、野鳥や自然への熱意の高さによるところが大きいことはいうまでもありません。

これまで、日本野鳥の会は探鳥会活動をその中心に据え、財団と全国 90 の支部等の連携団体が協力して、全国各地で運動を展開してきました。「探鳥会」という親しみやすい活動を軸に自然保護運動を展開してきたことが、全国にすそ野をひろげることができた要因の一つであり、日本野鳥の会の歴史はまさに探鳥会の歴史といっても過言ではないかもしれません。

当財団では、80 周年をむかえるに当たって、当会活動の原点の一つである探鳥会にあらためて視点を当て、その意義や手法、問題点等を連携団体のみなさんといっしょに考え、よりよい探鳥会活動のあり方について考えていくために、「探鳥会スタッフ通信」の発行を企画しました。

今後は、この通信を有効に活用し、時代の要請にあった探鳥会のあり方や手法について検討していくとともに、活発な情報交換を行っていきたいと考えていますので、探鳥会活動を支えるスタッフのみなさんの積極的な参画とご協力を、よろしくお願いいたします。

(理事長/佐藤仁志)

◆安西英明の探鳥会講座

「伝説の案内人の思い出」

■はじめに

日本野鳥の会は、いろいろな人がさまざまに関わって歴史を刻んできました。会員減少が課題となった今でも誇れることの一つは、全国に会員がいて、各地に連携団体（支部）があることだと思います。連携団体（支部）はそれぞれ個性的とはいえ、すべてに共通しているのが探鳥会で、これも誇れることではないでしょうか？ 私たちは、昭和9年（1934年）から、各地で探鳥会を続けているのです。

探鳥会で育てられたような私が探鳥会スタッフの皆様への連載記事を担当することになり、私の師匠のことから書かせていただきます。

<すけべじいさんの言い訳？>

「黒いカラス類は見分けるのが難しいので、声で聞き分けるのがよい。ガーガーと濁った声はハシボソガラスで、カーとかアーとか濁らないのがハシブトガラスだが、ハシブトガラスよりもっと澄んだ声のカラスがいるのを知っていますか？」

伝説の探鳥会リーダー、川田潤のお馴染のネタである。若い世代にはマリア・カラスを知らない人もいる今となっては、相手を見てやらないとスベることもあるのだが・・・



◀川田潤 1907～1995 年。日本野鳥の会東京支部長では中西、高野に続く3代目。（財）日本野鳥の会理事も務めた。日本野鳥の会の全国大会（1978 年、福岡）の記念写真から。

私は幸いなことに中西悟堂にも、高野伸二にも教えてもらったが、探鳥会の師匠は川田潤だ（みな故人で、敬称は略させていただく）。彼の語りは川田節と呼ばれ多くのファンがいた一方、探鳥会で若い女性だけ集めた川田スクールなる別グループで野鳥を見聞きする

ことには、ひがみもやっかみもあったし、すけべじいさんと呼ぶ者もいた。

私は当時まだ小学生だったので、若い女性と一緒に川田翁にくっついて行って野鳥についてたくさん教わることができたが、中学生になってからだったろうか、川田翁に「どうして若い女の子ばかり優遇するのか？」聞いてみた。翁答えて曰く「野鳥の魅力は、男の人よりも女の人に伝えた方が広がるんだ。若い女の子に野鳥好きが増えたら、その子が結婚して旦那や子どもにも伝わって行くんだから・・・」

40年以上も前のことなので記憶は定かではないが、川田スクール当時の女の子で、旦那や子や孫にまで、野鳥を教えているおばあちゃんが確かにいる。

<野鳥が匂う？>

拙著『野鳥 eco 図鑑』では、川田潤について次のように記した・・・

次々に野鳥を見つけ、見分け、聞き分けていく川田翁に、やがてギャルたちは感嘆とともに「どうしてすぐに気づくことができるのか？、瞬時に名前までわかるのか？」を問う・・・と、待ってましたとばかりに師匠、「ボクにはね（師匠は執筆では自ら翁を記すくせに、自分のことはボクと呼んでいた）、匂うんだよ」と答えていたものだ。

少しずつ野鳥がわかるようになった私は、師匠が言わんとすることわかった。要するに、慣れてくると、季節と場所から、見聞きせずとも匂うがごとく「そこに何がいるか」がわかってくるということだ。私が執筆を担当した図鑑には「野鳥を見つける、見分ける、聞き分けるコツは『慣れる、比べる、絞り込む』」と記しているが、その『絞り込む』は、師匠の『匂う』を言い換えたものだ。

余談だが、私も真似して「私には匂うんですよ」とやってみたことがある。が、「どんな匂いがするんですか？」と真に受ける人が多かった。師匠のような熟練、熟年でない身には言葉だけ真似てもダメなんだと、痛感した次第である。

<個性を抑えるか、活かすか>

さらに余談になるが、私が探鳥会リーダー若手のホープみたいにちやほやされ、得意満面になっていた頃の話も記しておきたい。師匠に「キミの解説は親切でよいかも知れないが、ボクたち年配者には早口で聞きとりにくい面がある」というようなことを言われた。天狗の鼻を折られた状態で、正直悔しかった。多少の早口は自覚していたつもりだが、ベテランや常連に対して「初心者に対して親切に」を一生懸命説いていた時代で、それを問題とは思っていなかった。

それでも師匠の言葉が気になったので、探鳥会を担当した際、当時はやっていたショルダーバックにカセットテープレコーダーを偲ばせ、自分の解説を録音してみた。それを聞いて、ショックだった。所どころで、自分でも聞き取れないような解説もしていたのだ。

恥ずかしながら、30年以上たった今も早口を直せてはいない。支部にお呼ばれして探鳥会リーダー研修会の講師役になると、探鳥会に合わせて個性を直したり、抑えるのもリーダーだが、個性を活かすのもリーダーの在り方だ、などとのたまい逃げをうっているのだが、年配者が多い時は特に気をつけるようにしている。

(普及室/安西英明)

◆探鳥会におけるリスクマネジメント

「シリーズ第1回：ヤマカガシ」

■はじめに

公益財団法人日本野鳥の会は、全国に90の支部等の連携団体を有し、連携団体を中心とした探鳥会の開催は、把握しているだけでも年間2,800回（2011年度集計結果）を越えている。

幸い、これまでに重大な事故の発生や、主催者に重い責任が課せられるような事案の発生には至っていないが、その可能性は少なくないと考えられる。ひとたび重大事故が発生し、賠償責任を問われたりすると、組織の存続さえ危ぶまれる事態に陥る危険性があることを、他の事例から学ばざるを得ないのが昨今の現状である。



そこで、野外における危険な生物を中心に、探鳥会におけるリスクマネジメントについて連載で紹介し、みなさんの探鳥会活動の参考としていただこうと思う。

■探鳥会とリスク

私たち日本野鳥の会が行ってきている探鳥会活動は、自然観察会などの野外活動に比べると、次のような特徴を有していると考えられる。

- ① 溪谷など、危険度の高い自然の中で開催することが少なくないこと
- ② 野鳥に注目するあまり、足下への注意が散漫となりがちであること

③ 河川の河口部や干潟など、大きな建物や樹木がない場所で開催することが少なくなく、落雷被害の危険性が高いこと

④ 高齢者の参加が多いこと。また初めて参加する人もあり、個人の情報把握が不十分なことがあること

このような特性を考えると、あまたある野外活動の中でも、探鳥会はリスクの高い活動の一つといえよう。

従って、探鳥会の主催者やリーダーにとって、探鳥会に於ける危険予測、事故回避、事故発生時の責任と対処法などに関する十分な知識の習得は、きわめて重要な要件である。同時に、自然が単に美しいもの、快適なものでなく、時に危険な存在であるという認識を持った上で、その危険要素を排除するのではなく、うまくつきあっていく手法について学び伝えていくことは、自然保護に貢献する探鳥会活動にとって、重要な要素でもある。

まずはじめに、野外で比較的良好よく出会う危険な生物の特徴や対処法から紹介することとする。

シリーズ第1回：ヤマカガシ

ヤマカガシは、比較的最近まで毒ヘビであるとの認識のないヘビであった。しかし、猛毒を持つヘビであり、その毒力はマムシをはるかに上回ることが分かってきた。

マムシなどに比べると、身近に生息するごくありふれた種であり、出会う機会のはるかに多い。したがって、探鳥会などの野外活動を行う時には、ヤマカガシに対するしっかりと知識を持っておく必要がある。

<ヤマカガシはどんな生き物？>

山や田畑、民家のまわりなどで最もふつうにみられるヘビで、全体として黒っぽい感じがする。

左右の側面に黒斑が並び、特に前半身では黒斑の間に赤い模様が目立つ。しかし、斑紋や色彩には変異が多く、注意が必要だ。幼蛇には首の後ろに



▲探鳥会は河口部や湿地など平坦な場所で開催されることが多い



▲ヤマカガシの成蛇：体長は1m前後

黄色い帯がありよく目立つ。体長は成蛇で1 m前後、寿命は6～7年といわれている。

<ヤマカガシの習性は>

あまり生息場所を選ばないが、カエルの多い水田や草むらの斜面などに特に多い。カエルを主な餌とし、オタマジャクシが多いときは、カエルよりもオタマジャクシをよく食べる。また、水中に潜って魚も食べる。他のヘビがあまり活動しない盛夏でも活発に活動する一方、比較的寒くなっても活動し、最も遅くまで見かけるヘビである。



▲ヤマカガシの幼蛇：首の後ろに黄色い帯がある

ヤマカガシは、マムシやハブと違って人が近づいただけで攻撃的防御のため咬みつくことはない。咬まれて重度の障害を生ずる場合は、素手でつかんでもてあそんでいる時の発生が多く、これまで咬傷を受けた報告事例のすべてが手や指を咬まれており、しかも男性に限られている。

気性が荒く、人が棒などで刺激すると頭を高く持ち上げたポーズをとることが多く、コブラのように首から腹の一部を広げ威嚇する。

<ヤマカガシの毒は？>

ヤマカガシの毒は凝血毒で、血液凝固が阻害され溶血作用による内臓出血などを引き起こす。ハブの毒力は、マムシの8倍、ヤマカガシはハブの10倍の毒性をもつといわれている。このことから、いかにヤマカガシの毒が強烈であるか分かるであろう。また、致死率も10%とマムシやハブの比ではないほど高い。これは、ヤマカガシそのものの毒力のほかに、猛毒を持っているという認識が一般的に低いことや、医師の病態に対する理解が低いことも一因となっている。

なお、ヤマカガシの毒が注入されると、マムシなどの場合とは異なり、10～60分で頭痛が起こるといわれている。

このほか、首の後ろにある頸腺を強く押すと黄色の毒液を出す。これが傷口や目にはいると激痛を感じ、ひどい目に遭うので併せ注意が必要である。

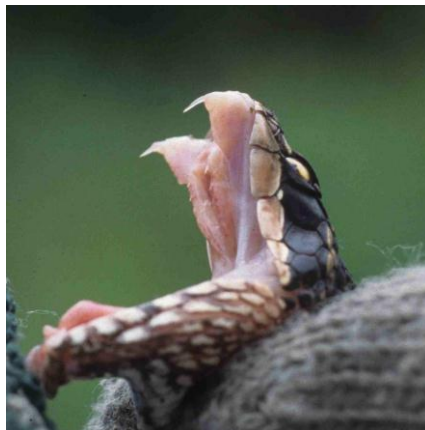
<あまり心配しなくてよってほんと？>

これまで述べてきたように、ヤマカガシは猛毒を持つヘビであり、気性の荒いヘビでもある。また、最もふつうに見られるヘビの1種で、出会う機会が多いことから、恐れおののく人も多いかもしれない。しかし、あまり心配する必要はない。

ヤマカガシには、毒腺はあるものの毒牙はなく、咬まれてもふつうの場合毒が注入されることはほとんどない。それは、口の奥に牙状の歯がありはするが、マムシのように毒液注入用の管や溝をもった毒牙がないためである。毒腺の開口部は、口の奥の歯と歯の間の歯ぐきにある。



▲ヤマカガシの牙状の歯は口の奥にある



▲マムシの毒牙は口の先端にある

ただし、子どもたちが毒ヘビであることを知らずに、素手でもてあそんだりすることは非常に危険であるので、注意を徹底する必要がある。子どもたちの指は細く、深く咬んだ場合口の奥にある牙で傷つけられ、その傷あとから毒が注入される可能性があるからだ。

長年、人のごく近くに生息し、なれ親しんできたヘビにもかかわらず、毒ヘビと認識されてこなかったのは、前述したような毒が注入されにくい構造にあると考えられる。

したがって、ヤマカガシの習性や毒などの特性を的確に知らせたり、つかまえてあそんだりしないことなどを徹底させておけば、あまり心配しなくてもよい。必要以上に神経質になったりすることは、自然に親しむことへの阻害となり、そちらの方が問題が大と思われる。

(理事長/佐藤仁志)

◆探鳥会保険集計結果（2013年2月分）

2月は67支部からご報告をいただき、計287回の探鳥会が開催され、のべ6,695人が参加されました。

表1. 2月の探鳥会保険集計結果(2013年4月10日現在)

支部	開催回数 (回)	参加者数		スタッフ数 (人)	合計人数 (人)
		会員(人)	非会員(人)		
小清水	-	-	-	-	-
オホーツク支部	2	20	6	2	28
根室支部	-	-	-	-	-
釧路支部	0	0	0	0	0
NPO法人日本野鳥の会十勝支部	-	-	-	-	-
旭川支部	3	23	0	3	26
滝川支部	0	0	0	0	0
道北支部	-	-	-	-	-
江別支部	-	-	-	-	-
札幌支部	2	31	16	5	52
小樽支部	2	5	7	2	14
苫小牧支部	1	5	0	1	6
室蘭支部	1	13	2	3	18
函館支部	-	-	-	-	-
道南桧山	1	14	5	3	22
あおもり	-	-	-	-	-
弘前支部	2	5	1	2	8
秋田県支部	4	26	7	5	38
やまがた	0	0	0	0	0
宮古支部	-	-	-	-	-
もりおか	1	12	7	4	23
北上支部	1	12	0	0	12
宮城県支部	4	49	11	8	68
ふくしま	2	48	0	5	53
郡山支部	1	14	0	1	15
二本松	2	4	0	2	6
白河	1	6	0	1	7
会津支部	-	-	-	-	-
奥会津連合	-	-	-	-	-
いわき支部	1	18	1	1	20
福島県相双支部	-	-	-	-	-
南相馬	-	-	-	-	-
茨城県	14	114	59	20	193
栃木	-	-	-	-	-
群馬	11	185	48	27	260
吾妻	1	10	0	2	12
埼玉	17	475	150	121	746
千葉県	10	131	40	41	212
東京	16	595	21	79	695
奥多摩支部	13	177	18	46	241
神奈川支部	15	240	64	49	353
新潟県	1	17	0	2	19
佐渡支部	-	-	-	-	-
富山	2	42	6	2	50
石川	2	40	0	5	45
福井県	1	6	0	1	7
長野支部	3	41	5	6	52
軽井沢支部	1	6	5	1	12

諏訪	1	17	25	2	44
木曽支部	-	-	-	-	-
伊那谷支部	-	-	-	-	-
甲府支部	2	41	6	4	51
富士山麓支部	2	8	0	3	11
東富士	-	-	-	-	-
沼津支部	1	15	1	2	18
南富士支部	2	58	10	3	71
南伊豆	2	20	0	4	24
静岡支部	-	-	-	-	-
遠江	5	64	5	15	84
愛知県支部	13	163	170	38	371
岐阜	-	-	-	-	-
三重	4	38	22	7	67
奈良支部	4	75	13	8	96
和歌山県支部	1	3	4	2	9
滋賀	5	61	14	10	85
京都支部	11	148	62	21	231
大阪支部	24	459	102	111	672
ひょうご	-	-	-	-	-
NPO法人日本野鳥の会鳥取県支部	3	32	14	3	49
島根県支部	2	9	7	2	18
岡山県支部	5	118	62	13	193
広島県支部	6	85	43	6	134
山口県支部	5	29	10	5	44
香川県支部	2	70	22	3	95
徳島県支部	5	59	16	5	80
高知支部	2	18	17	2	37
愛媛	6	53	66	14	133
北九州	3	44	0	3	47
福岡	8	196	34	15	245
筑豊	3	27	4	1	32
筑後支部	6	31	70	15	116
佐賀県支部	3	58	4	3	65
長崎県支部	-	-	-	-	-
熊本県支部	5	87	26	8	121
大分県支部	1	12	3	1	16
宮崎県支部	3	31	6	3	40
鹿児島	4	54	21	8	83
やんばる支部	-	-	-	-	-
石垣島支部	0	0	0	0	0
西表	-	-	-	-	-
全国	287	4,567	1,338	790	6,695

備考：-は報告がなかったことを示しています。

(普及室)

◆探鳥会スタッフ通信の購読について

探鳥会スタッフ通信は、支部の探鳥会スタッフならどなたでも購読できます。

ご希望の方は、「探鳥会スタッフ通信希望」と明記の上、①支部名 ②担当している探鳥会名 ③お名前 ④ご住所 ⑤電話番号 ⑥メールアドレスを記入し、tancho-staff@wbsj.orgへお申し込みください。

紙での発行につきましては、各支部2部ずつ郵送させていただきますのでそちらをご覧ください。よろしくお願いいたします。

★編集後記

東京では桜の盛りも過ぎて、葉桜の緑があざやかな季節となりました。今後は各支部の探鳥会にも訪問させていただき、紙面でご報告することで、様々な探鳥会の様子を知っていただける通信にしていきたいと思います。また、支部の皆さまからのご投稿も歓迎しておりますので、情報をいただければ幸いです。これからどうぞよろしくお願いいたします。

(普及室/堀本理華)

探鳥会スタッフ通信 第1号

◆発行

(公財) 日本野鳥の会 2013年4月18日

◆担当

普及室 普及教育グループ

〒141-0031 東京都品川区西五反田 3-9-23 丸和ビル

TEL : 03-5436-2622

FAX : 03-5436-2635

E-mail: tancho-staff@wbsj.org